

生態系活用フアーム

生態系を耕し、安心できる食を生み出す

途上国の人口爆発、異常気象による干ばつや原油高による価格高騰を含めた食糧不足は、今、まさにそこに迫る危機。私たちが生命を支えていくためには、環境に負荷をかけずに、安心できる食物を自分の手で得ることが重要なのです。

そこで注目されているのが、Permanent（永久の）

途上国の人口爆発、異常気象による干ばつや原油高による価格高騰を含めた食糧不足は、今、まさにそこに迫る危機。私たちが生命を支えていくためには、環境に負荷をかけずに、安心できる食物を自分の手で得ることが重要なのです。

途上国の人口爆発、異常気象による干ばつや原油高による価格高騰を含めた食糧不足は、今、まさにそこに迫る危機。私たちが生命を支えていくためには、環境に負荷をかけずに、安心できる食物を自分の手で得ることが重要なのです。

さまざまな手法が駆使された実験農場

「パーマカルチャー研究所（タガリ農場）」
（オーストラリア・プリズベン近郊）

パーマカルチャーの提唱者ビル・モリソンがつくった「パーマカルチャー研究所」では、生態系を活用するさまざまな手法が取り入れられています。

火山のカルデラの中にあり、以前は荒れていたという敷地の外周にはサツマイモが植栽され、4kmものスウェイル（雨水をせき止めるための長い溝）がつけられています。これらが斜面の土壌流出を防ぐとともに、雨水を畑や果樹へとめぐらせ、池に流れるしくみ。これにより、以前、干ばつで周辺農場の生産高が落ちたときも、農場には緑が青々と生い茂っていたそうです。農場は、機能別に3つのゾーンがつけられています。第1ゾーンには、雑草や虫を食べ、土をひっかく鶏の性質を活用した「チキントラクター」による有機農法の農園やハーブ園。第2ゾーンには、チナンバシステム（浮畑）を取り入れた50の人工池があり、牧場には

アヒルや豚などの家畜が飼われています。第3ゾーンには竹の防風林がつけられ、バナナ、キャッサバ、アカシアなどを植栽。家畜の糞を利用した養殖池には、ウナギなどの魚5000匹が養殖されています。研究所内には、研修生や見学者のためのビジターセンターが2カ所あり、食堂にはとれたての新鮮な食材による料理が並びます。



各畑はチキントラクターが作業しやすい大きさの円形につくられている。



チナンバシステム（浮畑）による池。そばに家畜小屋。



アヒル、ガチョウ、牛、豚などが飼育され、糞は肥料に利用。小屋壁面のアートも魅力的。



鶏が雑草を食べ、その糞を堆肥に利用するドーム状の可動式鶏小屋「チキントラクター」。



土壌の流出を防ぎ、栄養・酸素や保湿、虫のすみかを提供するために土表面を覆う。(右) サツマイモを利用したもの。(左) 枯れ草や段ボールを利用したもの。



スウェイルは水分供給を促すスポンジの役割をし、土壌流出を止める。

ビジターセンターでは農場で収穫されるさまざまな食材の料理が楽しめる。



道沿いにスウェイルがつけられている。



遊び心あふれるトイレ。



ガーデン全景。日当たりのよい北側（南半球は南北が逆）にレモンや亜熱帯植物を植栽。谷間の涼しい場所には桃などの果樹が植えられている。



(右) 軒下で種を陰干し。保存小屋は壁40cm厚で、室温15度、湿度50%を保つ。(左) 種は自然乾燥後さらに乾燥機にかけ、防虫のため3日間保冷してから-4℃で保管。現在、300種の種が保管されている。



野菜や花は品種ごとに500株をまとめて植栽。種が交雑しないようにほかの品種の畑と離す。



バイオインテンシブ農法は、コンパニオンプランツを活用し、雑草防止のため密集して植えるのが特徴。



種の保存にこだわるエコロジカルガーデン

「コアンガ・ガーデン」
（オーストラリア・オークランド近郊）

「コアンガ・ガーデン」は、20年ほど前にパーマカルチャーを学んだケイ・バクスターさんが、チェルノブイリの原発事故を背景に、子供に安全で栄養価の高い物を食べさせたいという思いからつくった農園です。ここで扱われている植物は、第二次世界大戦以前から種子を消毒せずに有機農法で育てられたものばかりです。さらにコンパニオンプランツなどを取り入れて、化学肥料や農薬を使わずに輪作を行う「バイオインテンシブ農法」が取り入れられています。「次世代に丈夫で栄養のある種を残していくためにも、地域の古い種を保存すべき」と、8割は在来種。ガーデン周辺には、そうした食を育て、食べるといった自給自足のライフスタイルを実践する集落も形成され、より完成度の高いパーマカルチャーが営まれています。